

## 防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業成果報告書

学校名：岩手県立住田高等学校

**I 事業の概要（地域の実情含む）**

本校生徒の居住地は、地元住田町が約4割、大船渡、陸前高田市が残りの約6割である。東日本大震災の被災地域に生活する生徒も少なくないが、その防災意識は発災直後よりも極僅かずつではあるが緩んでいるように思われる。また、校舎は津波による被災は想定されない地域にあるが、住田町作成の防災マップを見ると、周辺の至る所に大雨による土砂災害危険区域が存在している。加えて、住田町全体として超高齢化が進んでおり、独居老人宅等、災害時に自力で避難行動をとれない世帯も多くある。

このような状況に鑑み、地震・津波、大雨・土砂災害等多様な災害発生を予測し、発生時に的確に状況を判断して避難すること、すなわち自分の身を守るための避難行動をとることができるようにすることを第一と考える。加えて本校体育館が、住田町から災害時避難場所に指定されており、地域住民への支援について必要な知識や技術を身に付けておく必要があると考える。また、自然災害発生メカニズム等について理解を深め、防災意識の向上を図りたい。

以上の観点から、以下IIに示すとおりの取組を行った。

**II 取組の概要****(1) 取組内容****ア 教職員研修〔6月13日(月)〕**

県教育委員会事務局学校教育室学力・復興教育担当指導主事澤口良夫氏を講師として「学校安全計画・防災教育計画の作成」、盛岡地方気象台防災気象官三上康治氏を講師として「防災気象情報の活用について」、同じく地震津波防災官湊幸悦氏を講師として「地震に備えて」と題して、防災教育のあり方に係る講話を聴講。

**イ 緊急地震速報を活用した避難訓練 I**

〔6月22日(水)〕

(ア) 学校防災アドバイザーの湊幸悦氏(盛岡地方気象台地震津波防災官)を講師とし、地震の基礎知識と緊急地震速報についての講話を実施。

(イ) 緊急地震速報を活用した避難訓練を実施。併せて避難袋による避難訓練を実施。

**ウ 防災講話〔7月19日(火)〕**

住田町の防災担当である山田研氏(住田町総務課課長補佐)を講師とし、住田町の災害についての講話を実施。

**エ 非常時炊き出し訓練〔7月19日(火)〕**

家庭科の授業の中で、ハイゼックスを用いた炊き出し訓練を実施。

**オ 教職員研修〔11月18日(金)〕**

学校防災アドバイザーの福田利喜氏(逃げ地図プロジェクト)を講師とし、防災マップ「逃げ地図」の作成を体験。

**カ 防災体験セミナー〔12月6日(火)〕**

岩手県立総合防災センターにおいて、防災講話、ロープ結索、暗闇・煙体験、応急処置(心肺蘇生法)、地震体験等を実施。

**キ 災害ボランティア活動〔12月7日(水)〕**

認定NPO法人桜ライン311の活動である、津波の到達ラインに10mおきに桜を植樹する活動に参加。



## ク 防災講話〔12月14日(水)〕

学校防災アドバイザーの福田利喜氏(逃げ地図プロジェクト)を講師とし、防災マップ「逃げ地図」の作成を体験。



## ケ 緊急地震速報を活用した避難訓練Ⅱ

〔12月16日(金)〕

(ア) 緊急地震速報が流れ大地震が発生、校舎倒壊の恐れがあるとの想定で実施。

(イ) 訓練の実施を事前告知せず、抜き打ちで実施。壁面崩壊等による避難経路の制限を設定。

## コ 救急救命講習〔3月3日(金)〕

大船渡消防署員を講師に1年生全員が受講。

(2) 取組の検証・まとめ

ア 今年度の取組について検証・まとめを行い、職員会議で報告。〔2月14日(火)〕

イ 住田町教育研究所研究発表大会〔2月15日(水)〕

当該事業の内容・成果について発表。

## Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 成果

本事業の取組にあたり、①「多様な災害発生を予測し、発生時に的確に状況を判断して避難すること、すなわち自分の身を守るための避難行動をとることができる。」②「地域住民への支援について必要な知識や技術を身に付ける。」という2点をねらいとした。また、その都度生徒に自己評価(感想等)を書かせ、反応を確認しながら取り組みを進めた。

①について

感想等を見ると、多くの生徒が以下の点について記載している。

- ・「知識を身に付けることの重要性」を感じた。
- ・災害のときに慌てないよう「平時の準備、日常生活に於いて常に備えておくことが重要である。」
- ・「日頃から情報に注意し、冷静に判断し素早く避難することで身の安全を確保したい。」

このことから、こちらのねらいを概ね理解したものと考える。今回実施した事業はいずれも、実習を中心として体験的に学ぶことが多く、ほとんどの生徒が肯定的にとらえており、満足度も高かったことが理解に繋がったものとする。

②について

生徒の感想には以下の記述も少なくなかった。

- ・「3. 1 1の教訓を風化させることなく、伝えていくことが大切である。」
- ・「自分の命を守ると同時に、老人や子どもなど災害弱者への配慮も忘れてはならない。」
- ・「炊き出しが、こんなに早く、簡単に、衛生的に、おいしく、大量にできる道具があることに驚いた。家庭や、地域にも準備していきたい。」

このことから、もう一つのねらいについても概ね理解がされたものとする。

(2) 課題

Ⅲ(1)成果で述べたとおり、生徒の自己評価・感想等を見る限り概ねそのねらいについての理解はなされたものとするが、行動面の変容については課題が残った。2回目の避難訓練は、事前告知なしで実施したが、緊急地震速報で机の下に身を隠す等の一次避難行動をとった生徒の割合は、1年生 63.3%、2年生 25.7%、3年生 20.6%であった。1年生で比較的多数の生徒が避難行動をとっているが、これは一週間ほど前に防災体験セミナーを実施したことの影響と推察している。このことから、緊急時に「行動」がとれるようにするためには、繰り返しの訓練が必要であると考える。今後とも、「例年通り」の避難訓練ではなく、その都度工夫を凝らした内容での訓練を継続していかなければならない。

また、地域社会の一員として地域を担う者としての自覚を持たせるためにも、炊き出し訓練等授業の一環として行えるものは継続していきたい。計画に盛り込んでいた「地域防災福祉マップの作成参画」については、地域から作成の申し出がなかったため実践できなかった。この事業はもともと住田町社会福祉協議会が実施しているものであるが、今後、作成の申し出があった際には、ボランティア等参画の方法を検討し、できるだけ多くの生徒に取り組みさせたい。

次年度以降も、工夫しながら繰り返し防災教育に取り組んでいかなければならないと考えている。